

ふるさと文化財の森 朝霧高原茅場



富士宮市根原区財産区



はじめに

かつて、朝霧高原は「遠っ原三里（とおっばらさんり）」とも呼ばれ、山梨県との県境となる根原と人穴の間の地域はススキやヨシの草原が広がっていました。

毎年野焼きを実施している現在の朝霧高原は、雄大な富士山の景観を楽しませてくれるとともに、地域資源としての良質な「茅」を育てています。このような中で、根原区財産区の所有地が平成23年3月に文化庁「ふるさと文化財森朝霧高原茅場」としての設定を受けました。

地域資源としての「茅」を守るとともに、日本古来の茅文化を地域一体となり伝承していけるように、朝霧高原活性化委員会を中心として活動を続けていくとともに、朝霧高原茅場の資料としてこのパンフレットを作成します。

★富士宮市根原区財産区

明治22年の町村制の発布による上井出村への合併に伴い旧村（根原村）で所有していた共有地の一部が地域財産として残され、共有管理していくことを目的として、根原区財産区として残っています。

根原区財産区は、全体面積約641haを有しており、朝霧高原の草原地としては約152haで、残りの489haは山林となっています。

★朝霧高原活性化委員会

「朝霧高原活性化委員会」は、朝霧高原の4地区（根原、麓、富士丘、猪之頭）の住民代表、富士教育訓練センター、東京農業大学、NPO法人あさぎり古里創生ネット、NPO法人富士山麓観光まちづくり研究所などが構成員となり、地域資源を活用し地域の活性化を図ることを目的に活動しています。

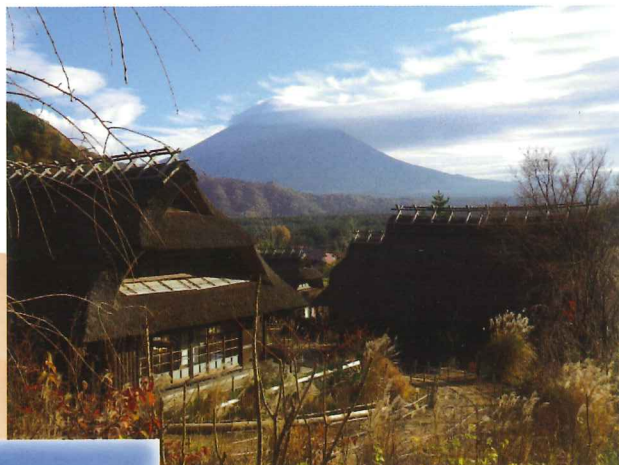
現在の活動の中心は、根原区の広大なススキ草原を活用し、茅葺屋根用の茅として商品化し安定生産するための体制づくりと、地域に残る貴重な茅葺き建築を保存し未来に継承する取組です。

朝霧高原活性化委員会のフィールド

富士宮市朝霧高原から富士河口湖町の富士山西麓から北麓地域が委員会のフィールドとなっています。残したい茅葺き建築の保全や茅を暮らしにとり入れた新たな生活文化の創出などの課題に取り組んでいます。



竹川家芝棟門（富士宮市麓）



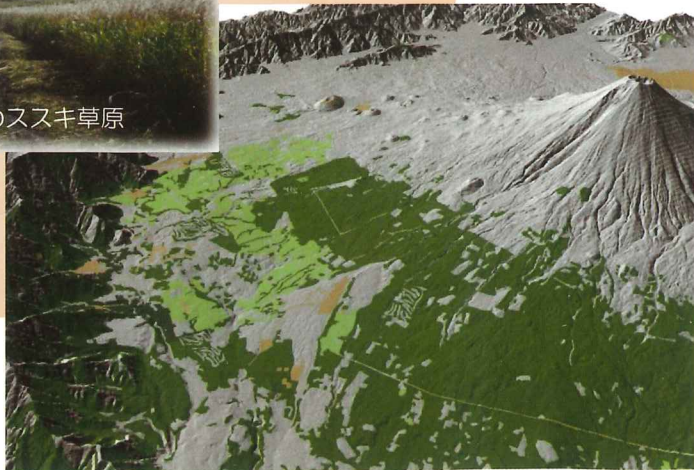
西湖いやしの里根場（富士河口湖町）



根原区財産区のススキ草原



井出館（富士宮市指定文化財）



朝霧高原活性化委員会活動フィールド

ふるさと文化財の森とは

国宝や重要文化財などの文化財建造物を修理し、後世に伝えていくためには、木材や檜皮、茅、漆などの資材の確保と、これらの資材に関する技能者を育成することが必要です。

このため、文化庁では、文化財建造物の保存に必要な資材の供給林及び研修林となる「ふるさと文化財の森」の設定、資材採取等の研修、普及啓発事業を行う「ふるさと文化財の森システム推進事業」を実施しています。

また、活動拠点となる「ふるさと文化財の森センター」の整備を支援しています。



「ふるさと文化財の森」設定地（平成 26 年 3 月現在）

茅場として設定されたふるさと文化財の森（平成 26 年 3 月現在）

番号	名称	所在地	所有者等
3	大内宿茅場	福島県南会津郡下郷町	大内区
16	金沢湯涌茅場	石川県金沢市	NPO 法人石川県茅葺き文化研究会
22	岩湧山茅場	大阪府河内長野市	滝畑自治会
23	上品山茅場	宮城県石巻市	石巻市
32	なかなた茅場	福井県小浜市	森の郷なかなた産物組合
42	朝霧高原茅場	静岡県富士宮市	静岡県富士宮市根原区財産区
43	日名倉山茅場	兵庫県佐用郡佐用町、岡山県美作市	後山部落自治会
48	高エネルギー加速器研究機構茅場	茨城県つくば市	高エネルギー加速器研究機構
53	牧の入茅場	長野県北安曇郡小谷村	親沢北観光委員会
54	西の湖近江八幡葎生産組合葎地	滋賀県近江八幡市	近江八幡生産組合
55	西の湖佐々木土地葎地	滋賀県近江八幡市	佐々木土地株式会社

ふるさと文化財の森 朝霧高原茅場

所有者 富士宮市根原区財産区

面積 約 152ha

- 活用の方針
- ㊦ 茅を安定供給する体制づくりとブランド化の推進
 - ㊧ 茅や茅場(草原)の持つ機能等に関する知識、情報の普及啓発
 - ㊨ 茅の森と朝霧高原の地域資源を活用した茅文化の普及啓発

活用の方針 上記㊦～㊨については設定地内を活用の拠点とし、㊨については設定地及び朝霧高原の地域資源、公共施設、観光関連施設等も併用し多様な展開を図る

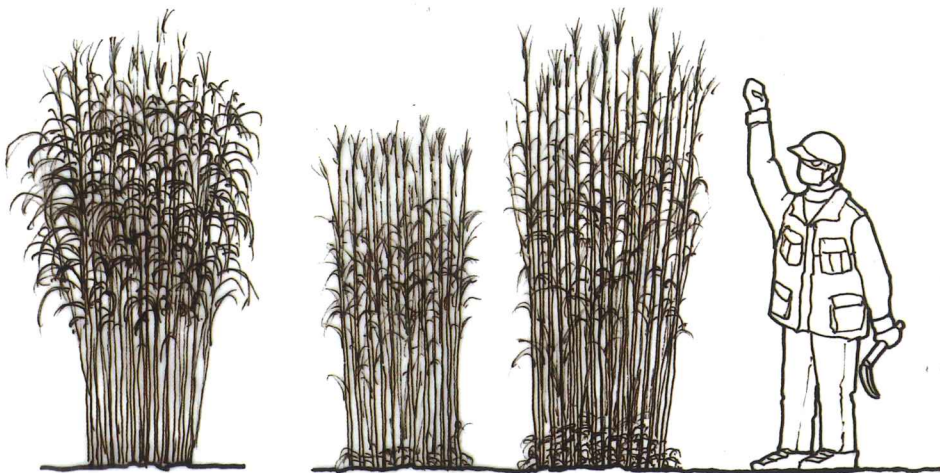
運営 「朝霧高原活性化委員会」において活動方針、活動内容を検討、協議のうえ立案し、委員会が運営者となり一致協力のもと実施

朝霧高原茅場の茅

茅の特徴

朝霧高原の茅はススキ茅です。草丈は1.5m～2.0m程度、茎は細くしなやかです。中束では千本を超える束となります。刈る手間はかかりますが、茅の密度が高くなるため、この茅で葺いた屋根は仕上がりが美しいといわれています。

葉が多く2月頃まで茎上に残ります。葉は2月末から3月末にかけて落ちて株元に溜まります。



12月～2月末にかけて茎上に多くの葉が残ります。

2月末～3月末に茎上の葉が落ちます。



火入れをすることで前年の古茅がなくなります。このような茅株は中央が空洞になっています。

朝霧高原の茅の特徴

茅束の規格・特徴

穂下長1.8m～2.0m 2尺5寸 ϕ (中束)葉付き

★12月～2月末に刈った茅束

中央部から上部にかけて葉が多く残り寸胴状ぎみの束となります。

★2月末～3月末に刈った茅束

すっきりとした円錐形の束となります。株元にハカマ(株元に落ちた枯れ葉)が付きます。



12月～2月末の茅束

2月末～3月末の茅束

朝霧高原の茅束

茅刈りの時期と体制等

朝霧高原では、例年12月に入って茅刈りが解禁となり、翌年4月初旬の火入れ直前まで行われます。

つまり、12月初旬から3月末の実質4ヶ月間が茅刈りの期間となります。

2月末以降になると葉が落ちてハカマも溜まり、作業効率も良くなります。しかし、それ以前に雪が降ると茅が倒れてしまい、雪解けまで茅刈り作業もできなくなります。作業ができる日数も少なくなり、目標とする出荷量の確保が困難になります。このため、多い葉を整える手間がかかりますが12月初旬から茅刈りを行う必要があります。

地元では、茅刈りの時期に椎茸栽培などが行われています。このため茅刈り作業と重なり、茅刈りの人手が不足します。このような状況から地区外の茅刈り技能士の確保が課題となっています。

活性化委員会では、茅刈り技能士養成講座や茅刈り解禁時に茅束の品質確保のためのみぞろえ講習などを開催しています。

NPO法人あさざり古里創生ネットやNPO法人富士山麓観光まちづくり研究所、富士教育訓練センター、東京農業大学オープンカレッジが活性化委員会と協働して、富士山麓の周辺地域や首都圏の一般社会人や学生を対象とした朝霧高原ふる森茅刈り隊や茅葺き体験隊などを募集し実行しています。

体験をとおして、朝霧高原の歴史や茅刈りの現状と取組などを知ってもらい、一人でも多くの茅刈り技能士志望者を確保する取り組みが行われています。

さらに、茅やススキを暮らしの中に採り入れて、生活文化の創造を目指すことを目的としています。



朝霧高原ふる森茅刈り隊の活動と成果

茅場の一年



300年続くススキ草原の火入れ

★春の火入れ（野焼き）

4月初旬、冬の茅刈りが終わって高原にフキノトウなどが顔を出しはじめる頃、草原に火が入れられます。火が入れられるとシカやノウサギ、キジなどが茅場から飛び出してくる姿が見られます。

朝霧高原茅場の火入れは、古茅を焼き払い、均質で良質な茅を手に入れるために行われていました。火入れを繰り返した茅株は、古茅が焼かれているため、株の中央部が空洞化してドーナツ状の株になります。

火入れの後は、地表面に光があたり地温が上がることで多様な植物が芽を出します。春の七草をはじめとする多様な植物相が出現し、動物相も多様になり、生物多様性の確保が図られています。



ススキ草原ウォーク

★夏のみどりの草原

風に波打つ青々としたススキ草原は、かつては牛や馬の餌として利用されていましたが、現在はその景観の価値が評価されています。全国有数の牧畜地帯である朝霧高原にあって、牧草地のみどりと一体となって、国立公園としての朝霧高原の牧野景観のブランドイメージをより一層高めています。

夏のススキの成長期には、良質な茅が生育する場所を確認しながら、茅刈りに使用する作業道を覆うススキや雑草の刈り払いが行われます。

朝霧高原に一番霜が降りる頃の穂が出る直前のススキは、炭俵の材料として利用されていました。周辺地域では炭焼き復活の動きもあり、インテリアとしての炭俵づくりも期待されています。



根原区民による防火線焼き

★秋の銀色に輝くススキ草原

富士山西麓に広がる朝霧高原の広大なススキ草原は、富士山のすそ野一面が銀色に染まり、他にない魅力的な景観となります。この頃、春の火入れに備えて防火線の刈り払った草を焼く防火線焼きが行われます。

「遠くばら三里」と云われた広大なススキ草原は、歩くことでススキに埋もれた様々な遺物などに会い、至るところで地域の歴史とふれあうことができます。

花とフクロウなどの鳥をテーマとした富士花鳥園があり、ススキフクロウがつくられています。東京農大のオープンカレッジ講座では、ススキ草原ウォークをはじめ、穂をつかったミミズクや茅を使ったすだれづくりなど、地域資源としてのススキ草原の有効活用を提案しています。



富士山を背景に茅刈り

★冬の茅刈り風景

12月初旬に茅刈りが解禁になります。茅刈り自体は体力的にもきつい作業ですが、雄大な富岳を眺めながらの茅刈りは爽快な気分を味わえます。茅刈りの最中ふと顔を上げると目の前にカヤネズミの巣が現れたりして、ススキ草原の中に棲息する動物たちの姿を想像してみるのも楽しみの一つになります。

春の七草は食して楽しむ



セリ ナズナ ゴギョウ ハコベラ



ホトケノザ スズナ スズシロ

秋の七草は花を愛でて楽しむ



オミナエシ オバナ キキョウ ナadeshiko



フジバカマ クズ ハギ

ススキ草原を活かした暮らし

生活文化の創出をめざして

ススキ草原の新たな活用

これまでの利用

茅葺き材料
生活用品
牛馬の飼料
堆肥
薬草
山菜

これからの利用

生物多様性の保全
二酸化炭素の吸収源
水源の涵養
国立公園の景観保全
バイオマスエネルギー
文化財修復用の茅の産出
伝統文化の継承
生活文化の創出
エコツーリズムの場
自然とのふれあい・環境学習の場
癒し空間



ススキミミヅクや茅葺き屋根の小鳥の巣箱、茅すだれ などのカヤのクラフトづくり



ススキは、軽量で加工もしやすく老人福祉施設などでの活用が期待されています。



カヤを囲んで話の輪が広がります。



十五夜に月の神に尾花を供える

ススキの名の由来は、葉が真っ直ぐに立つことから清めの意味と恥や不名誉を雪ぐ(すすぐ)ことから「スス」、芽が萌え出でる意味の「キ」からともいわれています。万葉の時代から、尾花、萱、茅(ぼう)と呼ばれ、月の神が宿るともいわれています。

かつて、青々としたススキは、牛や馬の飼料として利用する時に「まぐさ」、穂がでるとお月見に供える「すすき」、枯れると屋根材料としての「かや」と呼び名が変わりました。それほど生活に密着したものでした。

近年、環境保全や景観保全の観点からススキ草原の価値が見直されています。加えて、インテリアとして生活に潤いを与えてくれる素材として注目されています。



東日本大震災復興仮設住宅の断熱材として茅が利用されています。



日本茅葺き文化協会フォーラムでの展示

※ 資料提供 麻生 恵・安藤邦廣・木村悦之

富士宮市根原区財産区

事務局 富士宮市総務部上井出出張所 Tel: 0544-54-0003 〒418-0103 富士宮市上井出639番地